



豊田通商システムズ様

# URBAN PLAN PRESS

## 働き場改革

### WORKS・事例紹介

豊田通商システムズ / ミックウェア  
ゾーン / IL ファーマパッケージング

### PICK UP

OUR NEW OFFICE  
URBAN PLAN OFFICE

# 豊田通商システムズ / NAGOYA



クラウドインフラ構築やシステム開発などのITサービスを提供する豊田通商システムズ(TTS)。トヨタグループを主なクライアントとし、本社もトヨタ系の企業が保有するビルを2フロア使用している。そのうちの1フロアのリニューアルが完了したのは2022年初頭。新型コロナの流行で従業員のリモートワークが増えたのを機に、渡辺廣利社長の「もっとわくわくするようなオフィスで仕事をしよう!」という思いをかたちにした。TTSでは以前からリモートワーク利用を促進していたため、従業員は新型コロナの流行にも混乱することなく働き方の変化に対応できた。しかしこれまでのオフィスはデスクが規則正しく並ぶだけの、画一的なもの。効率や機能を優先した内装で、限られたフロアにより多くの従業員を収容するには適しているかもしれない。だが、「IT業界では、出社することが特別なこと」になろうとしている今、そこには従業員の心に響く何かが必要なのではないか。渡辺氏の「わくわく」には、そんな思いが込められている。新オフィスのコンセプトは公園(パーク)。移転プロジェクトを取りまとめた同社コーポレート本部の木村仁美氏の「実はここまでやることに不安もありました」という言葉に、

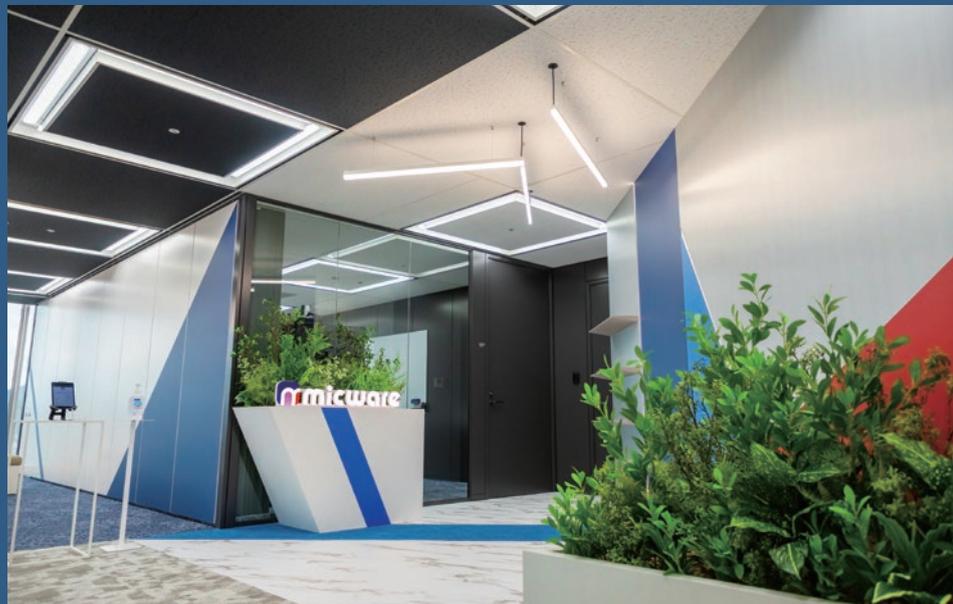
渡辺氏は「もっと派手にやってもよかったくらい」と笑う。造花などのフェイクグリーンをあちこちに配し街路樹や花壇を表現しただけでなく、天井の一部を切り抜いてフェイクグリーンを垂らすなど、オフィスとパークとの融合を表現した。エントランスから続くグレーのタイルカーペットにも路面標示のようなサインが入り、街路を思わせる。人工芝を敷いたリフレッシュエリアは、まさに公園の趣。出来上がったオフィスに否定的な声はないという。デスクは役員も含め全てフリーアドレスとした。用意した座席数は全従業員数の60%。人気のエリアは常に満席の状態だが、不思議と余裕を感じさせるレイアウトとなっている。特筆は席を予約するアプリで、スマートフォンから座席を予約し、誰がどこに座っているかも社内イントラで把握できる。従業員の提案で自社開発したという、ITシステム企業ならではの取り組みだ。街や公園が多様な顔をもつように、オフィス内はエリアごとに雰囲気を変える工夫を凝らしている。個人用のディスプレイが配されたデスク、ファミレスのようなボックスシート、カフェバー風のカウンターとスツールなど、気分や業務内容によって働く場を選ぶことができる。全体的にカラフルな配

色だが、間仕切りや什器の側面などに配された白色が目につく。実はこれ、全てホワイトボード。どの席でもすぐにミーティングが開けるようにという、ITインフラの構築を手掛ける企業ならではの備えだ。全部で7室ある会議室は「Dallas(ダラス)」や「Singapore(シンガポール)」などTTSの海外拠点がある都市の名称がついており、それぞれの都市をイメージした内装となっている。「違う部署の従業員が隣で仕事をし、そこで生まれた一体感から新しいモノが生まれる。そんなフラットな組織になれば」。パークを模したデザインにも、フリーデスクにも、海外拠点との一体感を出した会議室にも、渡辺氏のそんな期待が込められている。



右：代表取締役社長 渡辺廣利氏  
左：コーポレート本部 木村仁美氏

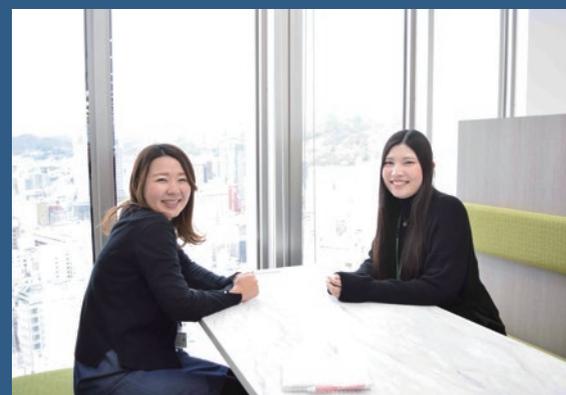
# ミックウェア / KOBE



ミックウェアの現神戸本社は、神戸港を望む高層ビルの最上層、24～25階。各フロアは約190坪ほど。神戸市内の別のビルから移転し、2021年10月に新神戸本社として開設された。同社の主業は、カーナビゲーションシステムの開発や、車載センサーの情報を一元化して繋ぐコネクティッド技術、位置情報サービスの提供など。従業員の多くがプログラミングやエンジニアリング業務に従事しており、多くの企業が技術系人材不足にあえぐなか毎年50～60名の増員を果たしている。今回の神戸本社移転のきっかけも、技術部門の充実。オフィスの移転を担当した同社総務人事部の松村侑美氏は「その結果、本社が追い出されて」と笑うが、主業を優先させる姿勢のあらわれだろう。本社オフィスのレセプションは25階。エントランスを入るとロビーの正面に神戸の街並みが広がる。2室ある応接用の会議室も全て景色が望めるレイアウトとし、本社としてのグレード感とともに眺望を楽しんでもらうことを意識した。1室ある社内向け用の会議室の壁は可動式で、開放すればエントランスエリアも含めて数十人が収容できる空間ができる。コロナ禍で実現していないが、いずれはイベントや説明会なども開催する構想だ。執務スペースは25階に約30名、24階に10数名が在籍している。24階

は技術系の部門が占め、今後の増員に備えている。25階には社長室、役員席をはじめ間接部門を計6部門配置。デスクは全て固定席で、役員も一般社員と同じタイプの席につく。約50席を用意したが、在席しているのは約半分。今後の増員に備えた余裕ある空間となっている。それぞれの部門のデスクが各島にまとめられているが、個人情報などを扱うため部門間のゾーニングには配慮したという。とはいえパーティションなどで仕切ることせず、部門間は幅の広い通路が通るのみ。室内は三方に窓が開かれ、どの席からでも座ったまま景色が眺められる。席を仕切るパーティションも感染対策用の透明アクリル製で、眺めを遮るものはほとんどない。ボックス席タイプのミーティングスペースも窓際に設けるなど、眺望を意識した開放感あるレイアウトとした。部門間の通路には卓球台、多目的テーブルにはスツールの代わりにバランスボールを置くなど遊び心も取り入れた。業務時間後、ラケットをふるう従業員の姿も見られるという。また、同社は神戸をはじめ全国に拠点を置いており、新しい従業員も毎月のように入社してくる。従業員同士が一体感を醸造する機会がどうしても少なくなるため、各拠点に大型モニターを配置し、新入社員の自己紹介などを流している。また多拠点であることを活か

し、各拠点の内装デザインは異なるテイストにした。総務人事部の泉まどか氏は「それぞれの個性が見えるようになり、出張や異動時の話題になることも多いみたいです」と話す。これもひとつの遊び心だろう。業務上、従業員が出社する機会が多いというミックウェア。そんな同社が目指すのは、「従業員が安心して働けるオフィス、気持ちよく働けるオフィス」。社会的にリモートワークが増えるなか、オフィス本来の役割をあらためて思い起こさせる。



右：オペレーション・ユニット 総務人事部 総務人事室 主事 松村侑美氏  
左：オペレーション・ユニット 総務人事部 総務人事室 スタッフ 泉まどか氏

社名：株式会社ミックウェア

住所：兵庫県神戸市中央区浪花町59 神戸朝日ビルディング25F（受付）・24F

プロジェクト：移転

HP：<https://micware.co.jp/>

# ジーン / TOKYO



株式会社ジーンの主業は、インターネット広告運用をメインとしたデジタルマーケティング。渋谷駅にほど近い六本木通り沿いのビルに現オフィスを構えたのは、2021年9月のことだ。2016年に東京・曙橋で設立し、2年後に早稲田に移転。その後、3年を経て渋谷へ移転してきた。渋谷はウェブサービスなどIT関連事業の集積地だが、移転先の選定で考慮したのは飲食店の多さという。ジーンでは、従業員同士のコミュニケーションを増やす目的で、ランチや夜食を会社が負担するという充実した福利厚生サービスを提供している。学生街である早稲田から、より多くの人々が集まる渋谷に移転し、多彩な飲食店で会食を楽しめるという期待があったが、新型コロナの流行で就業形態はフルリモートに移行。渋谷の飲食店巡りはしばらく先になりそうだ。新型コロナの影響は、オフィスにも及んだ。約270㎡のオフィスの3分の2を占める執務スペースには固定席が3席のみで、他はすべてフリーアドレス。数人でシェアできる大型のテーブルや本棚で仕切られた集中スペース、ミーティングや息抜きに使えるボックス席、カウンターとハイスツール、さらに防音ブースも設けた。約20名の従業員に対し、オフィス内にあるのは約15席。そのうち本格的な作業ができる大型テーブルは8席だけだ。現在、新しいスタッフが

毎月入社するという成長企業としては、少ない席数であり、出社を前提としないオフィスとっていい。「業務上、以前からリモートで働くスタッフは多かったのですが、出社する機会はけっこうあったんです」と話すのは、同社代表取締役社長の林田洋明氏。家でもオフィスでも働ける環境を整えようと、従業員の住まいは基本的に社宅扱いにし、勤務形態もゆるやかなものに。だがPCひとつあればどこでもできる仕事とはいえ、出社すれば隣の席の従業員との何気ない会話や聞こえてくる業務の話は刺激になる。ちょっとしたきっかけで、新しい発想やソリューションが生まれる。オフィスで他の従業員とコミュニケーションをとることで、そんな効果も期待できた。これまでは、どこでも働ける環境を整えることが働きやすさに直結していた。しかしそれは、従業員同士の結びつきを希薄にし、気付きを生み出すきっかけを減らしてしまうかもしれない。林田氏は「なんのために出社するのか、なんのためのオフィスなのか。この場所が従業員のためにできることを模索中です」と課題を語る。新オフィスの開設を機に、新たな取り組みも始まった。エントランスを入ってすぐ、オフィスの約3分の1の面積を占めるギャラリー「YUGEN Gallery」は、デジタルマーケティング事業とは一線を画す、現代アート作品を

楽しむためのリアルな場だ。様々なキュレーターやギャラリストが企画した現代アート作家のプロモーションや作品販売を行うためのプラットフォームとして展開していく構想という。単にギャラリー空間を設けたのではなく、新規事業の構築とっていい。林田氏は開設の理由を「多彩なアーティストが行き交う場所を創ることで、企業としてのクリエイティビティを高めるため」と話す。実はこのオフィスが入るビルは、数年後の取り壊しが決まっている。出社を必要としない業務において、リアルな場であるオフィスはどうあるべきか。林田氏の目は、早くも次のオフィス構築に向いている。



代表取締役社長 林田洋明氏

# ILファーマパッケージング / NAGOYA



コロナ禍で一気に進んだ新しい働き方。どこでも働ける社会の出現は、オフィスのあり方をも一気に変えつつある。愛知県一宮市に本社を置くILグループのILファーマパッケージングが開設したオフィスは、その変化が生んだ新しいあり方の一つかもしれない。薬瓶などの医薬品に貼付するラベル及びラベル貼り機の開発・製造・販売をメインとし、各地に事業所を展開してきた同社。2022年3月、本社工場3階に開設された「カスタマーサクセスセンター」は、営業部、企画開発部、品質保証部の各部署を集約した新しいオフィスだ。開設に先立つ数年前から、同社では変化を求める機運が高まっていたという。新しい組織体制、新しい働き方、新しいオフィス。それらを模索していたところに、新型コロナウイルスの流行が直撃した。必要に迫られ、急ぎょ取り入れられたかたちとなった「新しい働き方」だが、意外にも支障は少なかったという。新オフィスの開設プロジェクトを取りまとめた同社営業部の山本功一部長は振り返る。「リモートワークには懸念もありましたが、取り入れてみると思った以上にスムーズに仕事ははかどりました。業務によっては、自宅の方がデスクワークがはかどるという声もあり、これまで顧客訪問が中心だった営業も、リモートでも支障がないということがわかりました」。

浮き彫りになった「出社する意味」。同社ではコロナ禍後も見据えてリモートワークを本格的に取り入れ、なかでも外勤の多い営業職はフルリモートとする決断を下した。各地にあった営業所を統合し、営業員の一部は在宅勤務とした。施行から数ヶ月が経過したが、今のところ業務に支障はないという。「カスタマーサクセスセンター」は約100坪。現在はリモートで対応できない業務に携わる従業員が詰めているほか、今後は研修やプレストなどリアルな対話が活きる業務に使用する予定だ。「単なる仕事場ではなく、ソリューションを生み出す場になってほしい」。そんな思いから、仕事内容や気分によって働く場を変えることができるような様々なタイプの席を70席用意した。席は全てフリーアドレスで、常時在席しているのは20～30人ほど。各席に大型ディスプレイを設置したワークスペース、説明会や発表会などに使えるプレゼンスペース、集中して業務を行えるブースなどを設けた。入り口側に他の従業員との繋がりをもてるような場が広がり、奥に行くにしたがって静かに集中できるスペースを配置。さらに、前日と同じ席に座ってはいけないというルールも定めた。毎日違う席に座り、毎日隣に違う人が座る。新しい発想は、そんなところから生まれるのかもしれない。

「例えばフルリモートなら、外国にいても仕事をする事ができます。居住地も国籍も問わない。そんな就業形態が実現するかもしれません」。山本氏の視線は、「新しい働き方」のさらに先を見据える。現に同グループ企業の米国法人では、会社から600km離れたところに住んでいる従業員がいる。とはいえ、リアルな繋がりの価値が下がるわけではない。「将来的に、オフィスはそんな従業員たちやカスタマーが『待ち合わせる場』、『リアルに出会う場』になるかもしれません」。出会ってこそ、生まれるものもある。リアルな場の価値は、コロナ禍でかえって増しているのかもしれない。



営業部 部長 山本功一氏

# OUR NEW OFFICE

## TOKYO

“UPらしい「自由+働きやすさ」を追求したオフィス”  
アーバンプラン東京本社



沢山のサンプルを収納できる造作棚を設けたサンプルエリア。スライド式のホワイトボードやWindowsを搭載した書き込めるモニター等、打合せ機能も充実しています。

新事務所のエントランス。連なるアーチの入口とライン照明がオフィスの中へといざないます。Modularのミニマムな照明器具や、壁天井の特殊塗装、ベンチのモールテックス仕上などシンプルながらも質感にこだわった空間を目指しました。



天井ルーバーから連なるテーブルが印象的な会議室。配線をすべて隠しスッキリした空間に。

“やってみたかったことを試してみたオフィス”  
アーバンプラン大阪営業所

## OSAKA



例えばデスク。長い時間、体が接するチェアは慎重に選びたいですが、デスクって実はシンプルでいいのかも。シナ合板を数枚組み合わせてデスクの本体を作り、天板はメンテナンス性や触り心地を考えてファニチャーリノリウムを貼っただけのデスクです。



日々のオフィスづくりの中でふと浮かぶいろんなアイデア。「デスクって、いわゆる“オフィスデスク”じゃなくてもいいんじゃない？」「WEBルームって壁立てて作らなくてもできるんじゃない？」「新しく出た材料使ってみないか」そんなアイデアを自分たちのオフィスに盛り込んだ実験的なオフィスを作ってみました。



例えば壁。きれいに化粧したオフィスはもちろん素敵です。今回はちょっと冒険して「壁って、空間が区切れて音や視線が遮断できればいいんじゃない？」と本来の壁の意味に立ち返ってみました。

リモート会議が増える中で便利な「WEBルーム」。個室を作ったり防音性能を高めたブースを設置することが多いですが、設計段階でわざと「スキマ」を作り防音性を考慮した扉をつけただけで設えています。

## URBAN PLAN OFFICE



東京本社  
東京都新宿区西新宿 1-26-2  
新宿野村ビル 32F  
TEL 03-5909-0515  
FAX 03-5909-0516



大阪営業所  
大阪府大阪市北区芝田 1-1-4  
阪急ターミナルビル 9F  
TEL 06-6373-2340  
FAX 06-6373-2341



名古屋営業所  
愛知県名古屋市中村区名駅 4-5-28  
桜通豊田ビル 5F  
TEL 052-589-9981  
FAX 052-589-9982



横浜営業所  
神奈川県横浜市中区本町 6-52  
本町アンバービル 8F  
TEL 045-226-3566  
FAX 045-226-3567



ベトナム設計室  
Room 5D, 5 Floor, Ricco Building, 363  
Nguyen Huu Tho Street, Khue Trung  
District, Cam Le Town, Danang City,  
Viet Nam

